

## 武庫川女子大学 武庫川女子大学短期大学部

第6号

# FDニュース



### ● 目 次 ●

- |                                   |                     |
|-----------------------------------|---------------------|
| [1] 学科FDの取り組み<br>日本語日本文学科、日本語文化学科 | 2 FD講演会の報告          |
| [2] FD推進委員会の活動報告<br>1 FD学生座談会の報告  | 3 2011年度後期の授業公開を終えて |
|                                   | [3] シリーズ授業          |
|                                   | [4] 編集後記            |

## 学科FDの取り組み

日本語日本文学科 学科長 柴田 清継  
日本語文化学科

虚学という言葉、辞書には載っていないようですが、実学という言葉があるため、反義語としてその言わんとするところは分かり、時々耳にすることがあります。我が日文学科は、本学の中でこの虚学の最たるものを勉強する学科だと言えるでしょう。今でこそ大日には日本語教育系や言語情報系があり、短日も「社会に出てすぐ役立つ日本語力の育成」といったことを標榜していますが、学科のカリキュラムの中核となっているものは依然として日本語学と日本文学です。

工学部や医学部を出た人が、その専門能力を生かしてエンジニアや医者になるのと同じような意味で、卒業後その専門性を生かすことのできる人は、我が学科の場合、そう多くはありません。また、エンジニアが人間の生活を便利してくれる機器や装置を発明したり、医者が人の命を救ったりしてくれるといったような、人類社会に対する目に見える形での貢献も、我が学科の学習・研究の延長線上には望みにくい事柄です。

一方、「～文学」というような学問は、A段階を終えたから次はB段階というような階梯があまりはっきりしていません。したがって、ここまで到達したらこの資格が取れるというような学力の目安のようなものも、設定するのが困難です。

では、このような学科の存在の意味は、いったいどこにあるのでしょうか。この点については、日文科学生が10名いるかないかという小規模のごく一部の大学と、毎年一挙に200名ほどの学士が誕生し、かつ短日も抱えている本学とでは、区別して考える必要があるでしょう。前者においては研究者の養成をその主な目的の一つと位置づけることができます。発明や人の命の救済には結びつきませんが、確かに文学の研究もなくてはなりません。では、本学ではどうでしょうか。本学科の卒業生の一部が将来優れた研究者になるのは大変すばらしいことで、実際にそのような人もいますが、それ以外の大半の学生はどのような目的意識をもって勉強すればいいのでしょうか。

こういった事を私は考えぬ日とてないのですが、今の私のこの問題に対する答えは「己のためにせよ」です。『論語』に「古の学ぶ者は己の為にしき。今の学ぶ者は人の為にせり」という言葉があります。儒教は基本的に尚古思想ですから、「己の為に」学ぶ者が肯定されていることは言うまでもありませんが、狭い意味で己の利害損得のみを考えよということではなく、もっと広く自分自身を高めるために学べということなのです。我が学科に当てはめるなら、〈文学作品をはじめとする書物を読み、それを通して人間の本質に対する自分の理解を深め、洞察力を養っていくこと〉が当てはまると考えられます。大日なら、そのようにして読み取った事柄を整理し、分析・総合して卒論にまとめていくことにより、一層そうした思考力が練り上げられるはず。儒教と言えば、「修己、治人」とか「修身、齐家、治国、平天下」とかいった言葉が想起されますが、「平天下」までは行かなくとも、己を磨くことで、「人を治める」、すなわち社会に出てからのリーダー的資質を養ってやることも、教育の目標したいと思います。

さて、煎じ詰めれば、読むことのエキスパートを養成する、これが我が学科の独自性なのです。読む力を伸ばすためには、精読と多読を車の両輪とします。「若者に読書の習慣を」という最近よく唱えられている事柄が、我が学科にとっては最も喫緊かつ根本的な問題ということになるのです。娯楽や気の散ることの多い昨今、学生を「読書の虫」にするのは、おそらく至難の業でしょう。マニュアル頼みの社会風潮の下、「これとこれと、読みなさい」と指示すれば、素直に従う学生は案外少なくないのですが、本当の読書には、「好きこそものの上手なれ」で、楽しんで自発的に取り組む気持ちと姿勢が必要なのです。

そうした個々の問題点も克服した、より高度の読書指導法の研究・開発が、現在学科全体で取り組んでいるFDの営みです。



## FD 推進委員会の活動報告

### 1 FD 学生座談会の報告

昨年に引き続き、2回目のFD学生座談会を12月7日(水)に開催しました。今回は、本学の魅力やリアルなキャンパスライフの情報を学生の視点から発信している学生広報スタッフの7人に集まってもらいました。彼女たちは座談会に先立って、本学の重要なFD活動である「授業公開」をFD推進委員の教員とともに参観し、その上で座談会に臨みました。糸魚川学長にもご参加いただき、3つの授業を参観した学生たちと教員が、それぞれの発見を語り合いました。



#### FD 推進委員会 参加教員

糸魚川直祐 (学長、心理・社会福祉)  
 高橋 享子 (委員長、食物栄養)  
 小野賢太郎 (副委員長、教育)  
 渡邊 完児 (委員、健康・スポーツ)  
 北口 勝也 (委員、教育)  
 三浦 秀松 (委員、英語文化)  
 西尾亜希子 (委員、共通教育)

#### ■ 参観授業① 「アメリカ文化と文学の流れ」大英3年

すべて英語で行われる授業で、映画「ザ・グレート・ギャツビー」を見た後、そこに描かれたアメリカの文化や価値観について解説し、グループディスカッションをする。



日本語文化学科  
1年  
足立 麻理子 さん

**北口委員**：授業に参加してみてどうでしたか。

**足立さん**：まず4人ずつのグループで分かれるというのがすごく斬新に感じました。先生が発信するだけの授業じゃなくて、学生からも発信できる授業があるというのがおもしろい。

**松永さん**：先生が一つ一つのグループを回って、どんな話し合いをしているのかとか、何か困ってそうなグループには助けたりしているのがいいと思いました。

**西尾委員**：それは英語でディスカッションしたんですか。

**松永さん**：はい、英語で。

**小野副委員長**：それはすごい。

**北口委員**：僕が気になったことは、学生さんの反応が薄いんです。この授業はアメリカ流の授業で、どんどん質問をしているんですけども、それに対してなかなか手が挙がらない、ぱっと声が出ないんです。僕は、「先生はやりにくいのかな？」というふうにちょっと心配しながら見ていました。学生さんたちはどうでしたか。

**高橋委員長**：一緒に行かれた学生さんは、やっぱりそういう学生の気持ちがわかる？

**松永さん**：やっぱり手は挙げづらいです。シーンとしている雰囲気の中で、「はい」って手を挙げて、何か一人だけ浮いてるみたいなの。

**高橋委員長**：英文科の人はどうなんですか。

**川崎さん**：クラスの中でやっぱりできる子とできない子がいて、自分ができないと思っていたら、何か、自分で言った答えに自信がなくて言い出せないところはあります。

**北口委員**：逆に聞くと、先生がどうすれば、学生は発言しやすくなりますか？

**川崎さん**：そうですね。最初の、何か答えのヒントの一単語でも言ってくればそこから考えられるときはあるんですけど…。

**小野副委員長**：クラスがもうちょっと小さかったら…？

**川崎さん**：ああ。相談できる時間とかは欲しいなと思いますね。

**北口委員**：あの授業で、何かここはこうした方がよかったのというのはありましたか？

**足立さん**：映画のテーマが重過ぎて…。

**松永さん**：途中から見たので、いきなり重いシーンだったということもあります。



情報メディア学科  
1年  
松永 夕貴子 さん



英語文化学科  
1年  
川崎 瞳 さん

## ■ 参観授業② 「恋愛と結婚の科学」 短大1年

心理学をベースに進化生物学、経済学などの周辺分野からも恋愛と結婚に迫る。

参観時は、新聞記事を取り上げ、妊娠・出産とキャリアとの間で揺れる女性の心理に関して、学生に問いかけながら展開していく双方向の授業。



教育学科  
4年  
太田 裕子 さん

**三浦委員**：私たちが参観した授業では、先生が通路を歩いてマイクを学生にどんどん渡しながら授業をされていました。新聞記事を使って雑談的な話をしているだけではなくて、数週間前にやった合計特殊出生率のこととか、経済的な問題にも触れられていました。

**太田さん**：三浦先生は学生が活発に答えていたとおっしゃっていましたが、私、最初は「反応薄いな」と思いながら見ていました。それで思ったのが、予習・復習をしているのとしてないのでは全然違うなってことです。私もしてないんですけど…。学生の立場からしたら、正直、しなくてもわからないだろうとか思っていたんですけど、今回、客観的に見ると、先生に聞かれたことに対して的確に答えられず、適当に答えているというのがよくわかるんです。

**北口委員**：実は大学の単位って、授業時間90分だけでなく、授業時間以外の勉強時間も合わせて2単位なんですよ。たぶん、そんなことはみんなあんまり知らないと思うんですけど…。予習の大切さがわかったというのはおもしろかったですね。見たらすぐにわかるんですね？

**太田さん**：何となくわかりましたね。この先生の授業ではすごく言っていましたよね、「やってこないといけないよ」と。「えっ？」みたいな感じの学生は、みんなやっていないですよ。

**小野副委員長**：私の授業では、教科書とそこから抜き取ったものがプレゼンになるようにしているんです。それをあらかじめ読んでいないと、どこに何が書いてあるかわからない。それを一生懸命探して線引いているだけの子は勉強していないんです。ずっと線が引けて話を聞いている子は、「あっ、予習してるな」と。これは私がこの2年間、授業展開をそっちの方向に変えていっている部分なんです。だから今回の授業では、まさに予習しているかしていないかは、わかるような授業をされていたんですね。

**大倉さん**：この授業の良かった点というのは、「授かり婚」という、言ってみれば、より人間らしい感じ、もっと言えば、結構露骨なところまで学んでいっちゃるなと思いました。例えば、これがもし共学の大学で、同年代の男性の方が授業の中にいたら、学生もそこまで発言をすることはできなかったと思うし、真剣に悩んで授業を聞くということもちょっとしづらだろうなと思いました。女子大ならではの授業内容だなと思いました。

もう一つ、大情だったら、ある程度答えが出ている分野なので、答えを教えてもらったそれを深く掘り下げて学べばいいんですが、この授業が扱っているのは心理学、しかも結婚とか恋愛の考え方です。けっこう世代によって変わりやすいものなので、答えが出ない分野だと思うんですね。だから、学生の意見を大切にされているのですが、ただ、学生さんに発言を求める時間がすごく長いなと私は感じました。あまりにも長過ぎるとちょっと暇かなというふうに授業を受けていて感じていたんですけど、ただ、裏を返せば、そういう分野だからこそそういう一人一人の意見を大切にしているんだなとは思いました。

## ■ 参観授業③ 「教科理科演習」 大教3年

理科教室で学生が2人一組で先生の役をして、他の学生は児童の役をする模擬授業。テーマは「どんぐりで工作をしよう」、「昆虫ゲーム」、「太陽の動きと影のでき方」。



情報メディア学科  
1年  
葛谷 志織 さん

**西尾委員**：私たちが参観した授業の先生は、どういうふうにも子どもたちが作業できるための時間を確保しているかとか、その作業をしている間に、ちゃんと余計なものを片づけて、授業を効率的に進められるように努力しているかとか、そういうことを見ておられたようで、こまめにアドバイスされていました。すごく温かいまなざしで見守るという感じでしたね。「やっぱり教育実習に行く前とは全然違うね」というふうに、上手に褒めてあげたり、自信を持たせてあげたりが、すごく印象的でした。

**葛谷さん**：模擬授業では気分的に小学生になれたのですごく参加しやすかったです。私はどんぐりが一番楽しかったんで、ちょっと持ってきました。これ、すごくかわいくて、どんぐりでこんなトトロを作ったんですけど、学生の中にはどんぐりを持ってきていない人もいたんですが、先生は「小学生にどんぐり持ってきてきなさいよと言っても持ってこない子もいるから、持ってこないのが当たり前というぐらいで考えて、どんぐりいっぱい持ってきてきなさい」と、小学生の反応を大学生が小学生になったときの反応と置きかえていて、とてもわかりやすかったです。



日本語文化学科  
2年  
小矢野 加奈 さん

**小矢野さん**：私は、教育実習とか教職の授業を受けたことないんです。先生になるには大事なこと、例えば静かにさせるのに「静かにして！」みたいに言っても、もっと大きな声でしゃべったりするじゃないですか。でも、それは何か、「間」と「強弱」が大事だと言ってらして、教師になるにはそういうのも学んだなというのを感じて、すごくおもしろかったです。

**北口委員**：なるほど。ここを改善した方がというところはなかったですか。

**小矢野さん**：準備と準備の間が長かったので、だらける…じゃないですけど、しゃべったりかしている学生もいましたね。

**西尾委員**：あと、やっぱり席がどういうふうに決められているのかわからないですけど、これもよくありがちなことだと思うんですけど、本当に授業に参加したい学生は前の方に座って、

やっぱりそうじゃない、ちょっとはすに構えたような学生さんというのは後ろの方の入り口近くとかいうところに座っているので、そういう人にどうやって声をかけるかというのはやっぱり課題だと思いました、私の授業もそうですけど…。

**北口委員**：先生方も学生さんたちもありがとうございます。最後に、授業公開というこの取組についてはどう思われましたか？

**松永さん**：参観に行ける科目が限られていましたね。学部とかも…。

**北口委員**：数とバラエティーを増やすべきですね。

**渡邊委員**：こういう機会でも、それぞれ皆さんが違う学科の学生さんのいいところ、悪いところを知ったと思うんです。それはすごく意義があったと思います。自分のところだけじゃなくて、違う学科の先生はこんなことしているということを知るといのは非常にいい機会だと思います。

**糸魚川学長**：授業公開はするのは当たり前、いつだれが来ても授業は公開すべきものだというのが僕の考えなんです。初めは少数だったけど、最近増えてきた原因は何だと思う？ それは、「学生の声」なんです。大学を変えるのは学生さん自身なんですよ！

**北口委員**：皆さん、ありがとうございます。

参加した学生たちは、ふだんの「受講者」の立場ではなく、「参観者」として客観的に授業を見ました。各学科の特性、授業に対する教員の熱意や工夫など、たくさんの発見があったようです。我々大学で働く者がその発見から学ぶことはとても多く、今後の授業改善や本学FD活動に活かすことができると確信しました。

(FD推進委員 北口勝也)

## 2 FD講演会の報告

本年度の第1回FD講演会は、10月5日(水)の合同教授会終了後、同志社大学文学部教授の圓月勝博先生に『成績評価とFD』と題してご講演いただきました。圓月先生は、同志社大学で教務部長や教育支援機構長を歴任され、大学コンソーシアム京都のFD企画研究委員、大学基準協会の基準委員会委員等を務められ、大学の質保証に関する第一人者として多くの講演活動を行われています。

本講演では、この10年間の文部科学省の政策とFDの流れを概観し、1998年の「21世紀答申」以降、各大学は学生の満足度向上を重視したが、2008年「学士課程教育答申」まで出口の質保証を考えてこなかったと指摘されました。フィギュアスケートやピアノコンクール等の事例から、成績評価は、自分に関する正しい結果だけでなく、今後の指針を与えるものであり、審査員は評価基準を明確に理解し、選手を公平に育成するスキルを持つ専門家でなければならないと述べられました。大学教員は研究者であり教育者であり評価者であることが求められており、近年のFD活動で教育者の意識は浸透してきたが、評価者のスキルは十分に議論されていないとし、まずは各学科で教員同士が話し合うことが第一歩であると力説されました。さらに、同志社大学における成績評価(GPA)の分布情報公開の経験から、評価への信頼で学生の学習意欲は向上するとし、「FDの目的は学習成果の向上であり、満足度の向上はその手段に過ぎない。我々教員は、大衆化社会の中で素晴らしい評価文化の成熟を導くという使命がある。」と結ばれました。

講演会には、約190名の教職員が参加し、圓月先生の分かりやすく軽妙な語り口に聞き入り、アンケート結果でも、「大変良かった・良かった」が92%、「授業の参考になった」が82%と高い評価をいただきました。

(FD推進委員 北村真理)



### 3 2011年度後期の授業公開を終えて

「授業公開」を本格化させて2年が経過しました。回数を重ねる毎に公開コマ数が増えてきている現状を考えると、教員の意識の高さと熱意が伝わって参ります。その一方で、本学の教員が抱えている教育・研究・各種委員会の仕事・学生対応等々との兼ね合いでなかなか「授業公開」を参観できないという意見も毎回のアンケート調査や教員間の話題から聞こえてきます。このように本学がFD推進の一環として「授業公開」を継続していくなかで、まだまだ課題が山積している状況です。



「授業公開」は誰のために行われているのかと言いますと、学生のためです。質の高い学生を育てるために教員は、より質の高い授業を展開することが必要です。私は、学生が卒業した時に武庫川女子大学で学べて良かったと感じて貰えるような印象に残る授業を目指して、多くの先生方の素晴らしい授業の展開を学びたいと思っています。「授業公開」はこのような思いを持っている教員に良い機会を提供してくれています。後期の「授業公開」に際しての教員アンケートの生の声では、『難しい内容を学生たちへ分かりやすく教えるための工夫が感じられる講義だと思った。興味を引くような投げかけに対して、学生たちが生き活きとした反応をしていた印象が良かった』、『資料配布と板書やスライドをノートさせることで学習意欲を喚起させる方法はgood!!!』などの感想を述べられた先生方がいました。この先生方は、これらのヒントをご自身の授業の参考になさるのに違いないと思います。このような生の声がたくさん寄せられました。また「授業公開」をされた先生方には『公開したが誰も参観に来られなかった』という意見も多々ありました。この点については11月30日(水)に開催されました、『「授業公開」に関する討論会』で議論致しました。この討論会では“学科内FDをさらに推進させることが重要ではないか”、“「授業公開」期間を短縮して全教員が公開してはどうか”、“授業を公開した教員と参観した教員との意見交換が重要である”など活発な意見交換が行われました。FD推進委員会では、これらの意見交換で出された貴重なご意見を来年度の「授業公開」の実施に反映させながら実りのある「授業公開」を継続していく予定です。今後とも教職員のご理解とご協力をどうぞ宜しくお願い申し上げます。

#### 学科別公開授業数と担当者人数一覧

		共通	大日	大英	大教	大心	新大健	大環	大食	大情	大築	大音	新薬	大康	短英	短人	短健	短食	短生	院健修	合計
平成23年度 前期	コマ数	11	1	4	13	18	10	4	50	13	4		37	11	1		9	10		2	198
	担当者数	1	1	3	1	4	4	2	17	12	1		22	8	1		3	5		1	86
	実人数	1	1	3	1	4	4	2	17	12	1		22	5	1		2	1		0	77
平成23年度 後期	コマ数	33	4	63	17	13	15	1	49	6	12	2	35	3		8	10	3	1		275
	担当者数	3	1	1	1	5	7	1	16	6	3	2	17	3		1	4	1	1		73
	実人数	3	1	1	1	5	5	1	16	6	3	2	17	3		1	1	1	1		68
平成23年度 合計	コマ数	44	5	67	30	31	25	5	99	19	16	2	72	14	1	8	19	13	1	2	473
	担当者数	4	2	4	2	9	11	3	33	18	4	2	39	11	1	1	7	6	1	1	159
	実人数	4	2	4	2	9	9	3	33	18	4	2	39	8	1	1	3	2	1	0	145

(注) 合計欄の数値は、重複を含んだ延べ数を表示。

(FD推進委員 渡邊完児)

# シリーズ 授業

## 「私の実験授業」

生活環境学科 教授 牛田 智  
生活造形学科



大環、短生では、数多くの実験授業を開講しています。衣や住が、学ぶ対象の中心で、文系や造形的な分野もありますが、衣料品、インテリア製品、建築材料等の性質や取り扱いに対する本質的な理解を形成するためには、理系の実験科目も欠かせません。職業として、繊維製品の商品試験などの実験（試験・検査）業務に就く人も少なからずいますので、その技術を会得するというのも目的の一つにはなります。しかし、実際の対象に対して自ら手と頭を動かして体験するという実験授業は、表面的な知識を学ぶのとは異なり、極めて教育効果が高いと考えます。

私が担当している実験としては、界面科学実験や染色加工学実験があります。これらの特徴の一つとして、「実験と講義との連動」が挙げられます。これは、同じ教員が同じ期に実験授業と講義とを担当し、実験で行った内容を講義で解説したり、講義で理解した上で実験授業に臨んだりするというものです。学生にとって、実験を行ってレポートにしっかりした考察を書くのはなかなか大変なことです。本来ならば、図書館で調べて自ら考えて書くということが望ましいとは思いますが、「答」を求めて書籍を当たっても、そんなものを書いてはありはしませんし、書籍にはかなり難しく書かれているのが通例であり、結局は意味のわからないことを丸写ししたり、理解できないままでレポートを書くということに陥りかねません。この「連動」では、実験レポートを書くための「答」をその直後の講義で解説しているような形になりますので、講義をしっかり聞けば、いいレポートが書けるということになります。そのため、講義もしっかり聞くようになります。ただし、講義は実験の履修を前提とはせず、独立した授業として展開していますし、実験内容を理解するための考え方や理論を説明するのであり、レポートに書く考察の「答」そのものを提供しているのではないことは言うまでもありません。

多くの学生が実験と講義の両方を履修しており、その場合は実験をし、その意味するところを講義で聞き、理解したことを自らの言葉で実験レポートにまとめます。その後返却され、朱が入ったレポートでその適否がわかるとともにさらに理解を深め、講義の定期試験では、しっかりと論述問題に解答できるようになっている、という流れになります。当学科の学生にとっては苦手な理系の実験と講義ですが、授業アンケートでもこの「連動」は好評ですし、効果も上がっていると思います。さらに考える力をつけるような方策を考えながら、今後も続けていきたいと考えています。

### 編集後記

大学教育をマーケティング論的に捉えようという話は、ずいぶん前から耳にする。学生を顧客と考え、顧客満足、顧客利益という観点から教育内容を見直そうということだ。学生が満足してくれて学生の利益になるのは、とても結構なのだけど、しかし、大学にとって顧客とは誰か、顧客に何を提供しているか、といったことは、そんなに簡単な話ではない。

なにしろ、大学が取引している相手の多くは学生の保護者である。つまり、顧客は保護者とも言える。あるいは私学助成金などの国からの援助を考えると、顧客は社会全体とも言える。そういう見方だと、保護者が期待する人材や、社会にとって有用な人材を育てて送り出すことが顧客利益となる。

もちろん、学生が顧客で、大学は授業を提供しているというのが一番当たり前の考えではある。しかし学生にとっての利益と、保護者や社会にとっての利益が必ずしも合致するとは限らない。マーケティング論的に考えたからといって、問題が単純になるわけではないのだ。 (編集委員 MI)

【FD ニュース編集委員会】 西山明美、半羽利美佳、井上雅人、中山真理子

